The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

第一日　第１－３

国語科話しことば教育についての研究
－大橋富貴子氏の話しことば教育理論・実践を中心に ３ －

お茶の水女子大学附属小学校　相原 貴史

大橋富貴子氏が、小学校教育に携わり、児童のことばの生活を高める教育に力を注いできた約半世紀（1938～1981年）の間から、一貫して大切にしているものは「児童の含みもつあらゆる価値の方向」を見いだし伸ばしていくという考え方である。

戦前、東京女子師範学校附属小学校（現お茶の水女子大学附属小学校）では、小学校教育における作業教育のあり方を研究し実践していた。「児童自身が中心となり主動者となって、自ら進んで知識を獲得する」という点に重きをおいて進められたこの研究の中で、大橋富貴子氏の教育観が培われたと考えられる。

「児童の生活全体を指導」する中で、児童の持つ「好ましい個人差をますます個別化」していくことを大切に考え実践された指導は、1970年代から行われたお茶の水女子大学附属小学校の「創造活動」の精神につながるものがあるとともに、現在問われている「個性を生かす教育」に通じるものがあると言える。

また、経験主義的な学習が主に行われた時代における単元学習の単元の設定には、児童に具体的な活動の場を用意し、できるだけ抵抗なく学習に取り組めるようにするとともに、児童に望ましい活動のあり方を示し、集団の中においても活動がスムーズに展開できるようにするなどの手だてを施し、児童が主体的で伸び伸びとした児童の生活の中で行えるようにしようとする配慮が見られる。ここに至って、大橋富貴子氏の大切にしている考え方が、一層実践的に生かされていることを見いだすことができる。

話しことばの学習を進めていくためにも、児童の個性を生かす学習が望まれる。今回は、話しことばの学習における単元のあり方について、大橋富貴子氏の論文・実践記録を中心に考察を行いたい。

NII-Electronic Library Service